

右の頬を打つ者は誰か ——日本正教会の場合——

持田行雄

一 内村鑑三不敬事件

明治三十三年一〇月に教育勅語が發布され、翌年一月、その奉読式が東京本郷の第一高等中学校で挙行された。式場には正面中央に天皇皇后両陛下の写真（御真影）が掲げられ、その前の卓上には明治天皇が署名（宸書）した教育勅語が置かれたという。式辞、勅語奉読などの後、教員、生徒が順番に進み出て、宸書を奉拝（礼拝）することになった。

この時、囑託教員の内村鑑三は自己の福音主義的信仰から、この奉拝を「宗教的意味」に理解し、信仰の良心に基づいて宸書には礼拝せず、「チョット頭をさげた」だけにしたという。しかし、その内村の行為は、当時の国家至上主義的な天皇神格化を否定したものと理解され、一部の教師、生徒などから非難され、更には日本全国から攻撃されるようになる。このため、

内村は「依願解職」となって、ついに「枕する所なき」苦難の生活を強いられていく。これが世に言う「内村鑑三不敬事件」の概要である。そして、この一地方的な一つの小さな出来事がやがて日本のキリスト教世界全体を論争に巻き込み、更には、いわゆる「教育と宗教の衝突」事件にまで発展していくことになる。

内村は「教育勅語は実行すべきものであって、礼拝すべきものではない」と考えていた。しかし、そうした内村の信念に拘りなく、彼のとった態度は非難、攻撃の的となり、日本のキリスト教徒も否応なくこれについて発言せざるを得なくなってくる。当時のキリスト教徒の主張は必ずしも一様ではない。宸書礼拝に対して積極的に賛成する「可拝論」から、反対に、これを強硬に否定する「非拝論」まであった。しかし、概ね彼等は内村を弁護する立場をとっている。例えば、——

三並良は、「肖像或は文字を拝するは祖先崇拜教偶像教の異

物なり」として、断固これを否定したという。

また、押川方義、植村正久、三並良、丸山通一、巖本善治の五名は「敢えて世の識者に告白す」と題する署名入りの「共同声明」を発表し、天皇を神格化して宗教的礼拝を要求するならば、死を賭しても反対せざるをえないと告白した。影像礼拝や勅語礼拝に真つ向から反対するとともに、もし賢所参拝や靖国神社参拝などに宗教的意味がありとすれば、これらを強制するのは違憲行為であるとも主張している。

更に、植村正久は、最も毅然とした態度をとり、御真影礼拝や勅語礼拝は「殆ど児戯に類すること」であつて、当局者が独断的に「痴愚なる頭腦の妄想」によつて創作したものであるから、このような習俗を一掃することこそ、かえつて国民の義務であると論じている。

二 日本ハリストス正教会の態度

大多数のキリスト教徒は内村を擁護して世論を弾劾したが、日本の正教会だけは終始、内村を批判する立場を貫いた。例えば、正教司祭の保留（ぼうろ）森田亮は、『正教新報』（明治二五年二月一五日発行）に「不敬事件を論じて吾正教会の主義を明にす」と題する論文を発表し、次のように論じている。

内村鑑三氏の事件は、今では、世間がこれを喧伝して「拝影事件」とか「不敬事件」などと言っているが、このことは「実に小事なる者の如く」なれども、第一に「吾国古来の人情風俗

に反し」、第二に、古来吾国人の皇室に対し来たる忠愛の感情を損する感なき能ざらしむる等の事ある」においては決して黙止し去ることのできないものである。吾正教を奉ずる者はこれを「不敬の行為なり」と明言することを決して躊躇しない。このことは「専ら国風民俗に関する事」であつて、少しも「宗教上に関する所なし」。従つて、吾国古来の風俗慣例に背き、吾国人の思想に反する以上は、これを不敬の行為なりと断定してもよい。しかるに、内村氏やその弁護論者達が浅ましくもこれをもつて無心の偶像崇拜を敬禁する教理と混同して、このような事態に立ち至つたのは、その「僻見誤解」も甚だしいものであり、これは「頑陋編枯の觀念」と言わざるを得ない。

この事件は国家とキリスト教（とりわけ日本ハリストス正教会）との間の関係がどのようなものであつたかを明かにする。事実、ただ日本の正教会だけが天皇制に対して司祭森田に代表されるような立場をとつた。しかし、それにはそれなりの理由があつたはずであり、同時に、そこに日本正教会の一つの「個性」を見てとることもできよう。

日本のハリストス教会はロシア正教の宣教師ニコライ（俗名イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン）によつて幕末期にもたらされ、創建された。

ペテルブルグ神学大学の学生であつたカサートキンは、宗務庁（*synod*）が公示した在箱館ロシア領事館付き司祭職に就き、修道司祭に叙せられて、翌一八六一（文久元）年六月に来日する。箱館で八年間日本語と日本歴史を学んでから、ロシアに戻

り、その二年間に宗務庁から日本宣教団（日本伝道会社）設立の認可を取り付け、再び宣教団の「長」として一八七一（明治四）年に来日している。

やがて、本拠を東京に移した日本宣教団の活躍にはめざましい発展が見られる。とりわけ初期の段階では、「すべての部局が、発案者にして参加者にして事業全体の中心であったニコライ大主教の直接関与のもとで動き出し、生き生きと活動」していた。例えば、附属の「神学校の運営を直接司っているのは教員会議であるが、この会議は討論したことや必要なことをすべて大主教に検討してもらい承認を受けていた」という。ニコライはほとんどツァーリのな力を掌握していたのである。

不敬事件が発生した一八九一（明治二四）年には、「皇居をあなどるかのように全都を下に見てそびえ立つ」として評判の悪かったニコライ堂が落成し、「成聖式」が行われている。不敬事件からわずか二ヶ月後の三月のことである。日本正教会はまさに絶頂期を迎えていた。

従って、天皇制に対する日本正教の態度は、ニコライ大主教自身のとった態度でもあり、同時にロシア正教のそれでもあったと考えてよいだろう。

三 キリスト教の展開

ロシア正教はギリシア正教の流れを汲む。この正教の成立史は複雑である。しかし、差し当たりここでは、コンスタンティ

ヌス帝によるキリスト教の公認について考えれば足りる。

コンスタンティヌスとリキニウスとは、三一三年に、ミラノで会談し、——「全人類の利益となるものうち、神への礼拝は当然のことながら我等の第一の最も主要な関心事となるべきものであり、天に在す神が我等と我等の統治下にあるすべての人々に慈悲深くあらせられるように、キリスト教徒や他のすべての人々がそれぞれに好む宗教に従う自由を持つべきである」ということは正しいことである」と決定し、——「それ故、以前に我等が指示したキリスト教徒に関する規定にはもはや関係なく、この宗教を選ばずすべての者が、妨害や支障なしに、それを保持することを許され、いかなる方法においても悩まされたり干渉されたりすべきではないこと」を宣言した。同時に、他のすべての者も、それぞれの宗教を自由に、制限なく信じる事が許されている。

この「公認」は単にキリスト教が帝国内における多くの宗教の中の一つの宗教になったことを意味していたにすぎないが、しかし、それはその後のキリスト教の展開に関して様々な可能性を持つことになる。宗教が国家と結合する最初の切掛けをなしたのである。事実、その後のコンスタンティヌス帝は、アリウス派とアタナシウス派との論争の解決に乗り出し、三二五年にはニカイアに宗教会議を招集する。そして、この会議がアリウス派の追放を決定すると、両者の融和を図り、アリウス派聖職者の追放を解除し、三三五年には反対にアタナシウスを破門し、追放した。彼が正式にキリスト教に改宗したのは、その

生涯の最後に至ってからのことである。

皇帝(国家)権力に干渉され翻弄されるようになって以来、キリスト教は上・下二つの方向へと分裂していく。貧しい者の立場から貧しい者に語りかけて、迫害されながらも、殉教者の信仰にまで結晶し、公認後は修道一筋に生きようとした人々の心の中に生き残っていったイエスのキリスト教、すなわち「左の頬を向ける者」の宗教と、公認されると同時に、形式的には帝権の上位に位置しながら、実質的には国家権力に従属しつつ地上の支配権を欲しいままにするようになるパントクラトールのキリスト教、すなわち「右の頬を打つ者」の宗教とに二極分化していくのである。

四 キリスト教の国教化

「右の頬を打つ者」のキリスト教と「左の頬を向ける者」のキリスト教への二極分化を決定的にしたのは、テオドシウス帝によるキリスト教の国教化である。——使徒の教えと福音の教理に従って、等しい威厳と神聖な三位一体のうちにある父と子と聖霊の唯一の神性を信じて、自らキリスト教徒となったテオドシウス帝は、この基準に従う者がカトリック・キリスト教徒という名称をとる権利を与えていった。しかし、それ以外の者は「愚かな狂人」であるから、異端者という不名誉な名で呼ばれるべきであり、彼等の会堂に対して教会の名を与えるべきではないなどとも命じている。こういう人々は、第一に神の

審判による罰を受け、第二に我々の権威が天の意志に従って下す罰を受けることになろうというのである。

従って、テオドシウス帝は、異端者がその違法の集会を市内で開くことを許可しない。彼等は教会の門口からも完全に占め出されなければならない。全世界のカトリック教会がニカイアの信仰を保持する正統な司教達のもとへ戻ることができると同時に、もし彼等が何らかの妨害を企てるならば、彼等の暴動を鎮圧して、都市の城壁外に追放すべきであると命令する。

テオドシウス帝はコンスタンティヌス帝以来のキリスト教支持政策を続行し、更にこれを徹底させていった。三九二年に、彼はローマ伝来の神々の礼拝を全面的に禁止し、ニカイア宗教会議の決定を正統信仰と定めて、キリスト教を「唯一無二の国教」としたのである。キリスト教は、文字通り「覇道の宗教」¹⁰となった。こうして、ローマ帝国は、「キリスト教的ローマ帝国」となり、異教の神々が歴史の舞台から遠ざかるにつれて、信仰論争も「もはや異教対キリスト教ではなく、キリスト教内での正統・異端論争に移っていく」ことになる。

「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。」(マタイ五・三九―四〇)。イエスが貧しい群衆に向かつて語ったとされるこれらの言葉の中の「右の頬を打つ者」は、本来、「左の頬を向ける者」とは全く異なっていたはずである。これらの言葉の前には、「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わた

しは言っておく。悪人に手向かつてはならない」(マタイ五・三八―三九)という文言が置かれていることに注意しなければならぬ。「右の頬を打つ者」と「左の頬を向ける者」との敵対関係が明白に前提されていたからこそ、左の頬を向ける行為が「敵を愛し、迫害する者のために祈る」(マタイ五・四四)愛の行為としてキリスト教倫理の中核になり得たのである。

しかし、このキリスト教倫理はキリスト教そのものが国教化されて変質する。上に見たように、「テオドシウス法典」第一六巻第一章二節や第五章六節などに見られるキリスト教は、すでに「右の頬を打つ者」のキリスト教である。異端者は皇帝の權威が天の意志に従って下す罰を受けなければならない。ここでは「右の頬を打つ者」も「左の頬を向ける者」も、正統と異端という闘争において、共にキリスト教徒なのである。こうして、公認以前には殉教者の宗教であったキリスト教が、同一のキリスト教の名のもとに、一方は「右の頬を打つ者」(すなわち、国家権力を中核とする支配者や高位聖職者層)のキリスト教へ、他方は「左の頬を向ける者」(すなわち、義のために迫害される(マタイ五・一〇)禁欲者や修道者層)のキリスト教へと二極分化を遂げていく¹³。

五 ロシア正教の発展

キエフ・ロシアがウラジーミル公によってキリスト教を国教化にしたのも、テオドシウス帝によるローマ帝国の場合と同様で

あった。このキリスト教の公的受容は九八八年のことという。無論、それ以前にも布教が行われ、それなりの成果はあがっていた。キエフ・ロシアが政治勢力を強めるにつれて、周辺地域の国々から、ウラジーミル大公に新しい宗教を導入するよう勧める使者が多くなる。「当時の世界にあつては有力宗教の導入が新興国家の地位を高める手段であつた」からである。

九八六年には、イスラム教、カトリックのキリスト教、ユダヤ教、東方正教などの人々が信仰を勧めに訪れた。そして、翌年、ウラジーミルは「家柄がよく思慮深い家来を十人」選んで、それぞれの宗教の優劣を実地に調べさせる。彼等は各地を訪問後、コンスタンティノポリスにやって来る。そして、広々とした教会堂(多分、ハギア・ソフィア教会か聖使徒教会)での荘厳な儀式にすっかり心を奪われてしまう。彼等は、戻ってくる時、「私たちは天上にいたのか地上にいたのか分かりませんでした。……あそこでは神が人々とともにおられ、彼らの勤行がすべての国にまさっていることだけは間違いありません」と報告したという。教会堂内のイコン、司祭の礼服、合唱隊の聖歌、たゆたう香の煙――感覚を幻惑させる東方教会の華麗な典礼が完成を見たのは、ちょうどこの頃であつた。

翌九八八年、ウラジーミル大公はビザンチン帝国領のケルソネソスで洗礼を受け、ビザンチン皇帝バシレイオス二世の妹アナを妻にする。やがてキエフに戻ると、彼は「異教の偶像を破壊させ、臣下や町の住民をドニエプル川の岸边に集め、東方教会の伝統的な浸礼の方法で洗礼を受けさせた」という¹⁴。

キエフ・ロシアもまた、公国支配者がキリスト教徒になることによってキリスト教国化した。そして、東ローマ帝国の遺構を受け継ぎ、教会が国家機構の一部に組み込まれた、ロシア正教会独自の伝統を形成していく。ロシアはその後教世紀も経ずして東方正教界最大の教会を持つことになる。しかし、その主流はどこまでも、教権が信仰上の理由からではなく、むしろ帝権が支配徹底上の理由から、キリスト教世界内の批判や改革などを異端として排斥する「右の頬を打つ者」のキリスト教であった。やはり、覇道の宗教の道を歩んでいくのである。

ピョートル大帝（一六八二—一七二五）とともにロシア正教会は新しい時代を迎えることになる。西欧の急激な発展に強い衝撃を受けた大帝が、新首都をサンクト・ペテルブルグに建設し、ロシアを西欧的な近代国家に作り変えようと、徹底した欧化政策を実行に移したのである。そのため、彼は「ロシア正教会の自主独立権を削ぎ、教会を西ヨーロッパのプロテスタント教会にならって国家に奉仕する国教会に変えよう」とした。

ロシア人民が教会に対して献身的であることを熟知していたピョートル大帝は、「時間稼ぎをしながら」、徐々に教会権利の剝奪を企てていく。そして、一七二二年までには、制度上の改革をほぼ完了する。その最大の改革は「総主教座の廃止」であった。総主教座に代わって、皇帝（ツァーリ）が選任する二人の聖職者からなる「宗務院（シノド）」が設立される。これは教会の管理、統制に当たる監督機関である。二人の構成メンバーは主教、修道士、妻帯司祭から成るが、彼等の任免権は皇

帝が独占した。

宗務院はまた、皇帝に直屬して世俗の大臣である「宗務院総長」の支配下に置かれた。宗務院総長は宗務院に責任を負うべき正式の構成員ではなかったが、彼の承認なしに宗務院は議決することはもちろん、討論することさえ許されなかった。

その完全な意味において、ロシア正教会のキリスト教は「右の頬を打つ者」のキリスト教となった。ここに「覇道の宗教」は制度的にも一つの完成を見たのである。

いまやロシア正教会はその自由と自治権を剝奪され、世俗権力の支配下に完全に従属することになった。こうした国家の教会支配は、更にその後のエカチェリナ女帝（一七六二—一七九六）の治世下に強化され、一九一七年の共産主義革命によるロマノフ王朝崩壊まで存続することになる。

イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン（のちのニコライ）は、ちょうどこの宗務院制度を通して、帝権が教権を支配していた（その意味では最もロシア正教会的な在り方をしていた）時代のキリスト教の中に生まれ（一八三六）、そのキリスト教信仰を身に付けて成長した。

六 日本における正教の宣教

ニコライが日本宣教師の長として再来日してからほぼ十年後のある年、ペテルブルグで「ペテルブルグ主教区宣教委員会」総会が開かれ、そこでオルナツキー司祭が「日本におけるロシ

ア正教宣教師と正教会」と題する講演を行った。⁽¹⁶⁾ それ(中村健之介訳)によると、——「是が非でも東京にキリスト教復活大聖堂を完成させなければならぬが、それは「わが正教のルーシ」[ロシアの古称]が九〇〇年まえに体験したよろこばしい日「ギリシヤ正教が国教として採用された日」……その日がやってくる、日本の帝が自分の民のためにどの宗教を採用したらいかを思索したとき、日本人が「ロシア正教の教えが一番です。正教の聖堂ではすべてがまるで天国のようです。わたしどもの言葉によって帝が正教を選ばれますように。そうなりませうように！」と言うようになるため」であるという。⁽¹⁷⁾

無論、これはニコライ大主教の考えをも代弁するものであった。事実、ニコライもまた次のように語っている。——「どの宗派が日本で優勢をしめるかという問題の答が出る日は、さほど遠くないと思われる。かつてロシアでこれと似た問題が生じたとき、ヴラヂーミル公はこの問題がロシアによって極めて重大であることを考慮し、最善の解決を求めて可能な限りのあらゆる手立てを講じた。……願わくは日本政府もまた日本のために、真理そのものの利をはかり、かつ自国民の精神的並びに物質的利益を目指して、慎重と賢明をもってこの問題を解いてほしい。」⁽¹⁸⁾

ロシア正教が日本国天皇により、国教として採用されることを期待するのは「いかにもキリスト教がヴラヂーミル公によって国の宗教とされたロシアの教会人らしい考え方」であると思われるが、このような考えは、必ずしもロシア正教宣教師だ

けのものではなかったようであり、次のような資料も伝えられている。すなわち——「もしも陛下が終極的に、キリスト教を日本に受け入れることを希望するようなことがある場合には、陛下はすべての者に魁けて洗礼を受けなければなりません、それは先々教会の長としてその支配下にある何百万もの国民の指導者となるためであります。もしも陛下がそのような決定を行なうならば、ヨーロッパの主権者たちはどんなにか陛下を尊敬することでありましょう。」

これは、長崎在住のオランダ人ヘールツの『日本年報』第八章「一八七二年の日本」に紹介されている「帝への公開書状」の一部分であったために、明治初期のカトリック・プロテスタントの宣教師達がロシア正教ニコライやオルナツキーのように天皇や日本政府による国教採用の期待を表明した文章であると考えられてきたが、中村健之介氏の推測によれば、これは、明治の啓蒙家中村敬宇の『擬泰西人上書』の中の文章がヘールツの『日本年報』に書写されたもの⁽¹⁹⁾である。

もしそうであるならば、明治の日本人の中にもキリスト教の国教化を願う人々のいたことが推測される。宣教師の活動は、いつの時代であれ、ロシア正教の場合に限らず、宣教地のキリスト教化をねらって行われる活動であるから、その地に彼等の活動の意図に同調する人々が出現したとしても何ら不思議ではない。事実、最近の研究によると、日本の音楽の近代化(西洋化)ですら、本当のところは、日本の「キリスト教化」のことであったという。『小学唱歌集』の隠された正体は、秘められ

た賛美歌集だったのではないか、そして、日本音楽の西洋化、
実はキリスト教化というこの日本近代音楽の運命を決定的にし
たボストン小学校音楽教師の指導者ルーサー・ホワイティン
グ・メーンソンを日本に呼んだ人物は森有礼だったのではないか
というのである。²¹

七 ロシアと日本との関係における正教会

どの派のキリスト教を採用するか、日本政府は慎重、賢明に
検討して欲しいという先に引用したニコライの言葉は、いかにも
キリスト教を国教としたロシアの宣教師らしい発言であった
が、しかし、この発言の根底には、カトリックやプロテスタント
のキリスト教に対して、ただロシア正教のそれだけが唯一の
正しいキリスト教であるという信念が前提されている。その堅
固な信念は、そのまま帝がキリスト教を採用する場合には必ず
ロシア正教を採用するはずであるという確信につながっていく。そ
れがまた、内村鑑三不敬事件に対しても、日本の正教会に、他
の宗派とは異なった立場を取らせた理由でもあった。

事実、正教の典礼には、祈祷の文句の中に必ず皇帝や皇后の
ために主に祈るという言葉が入っている。これはロシアの場合
に限らず、ギリシアの場合もそうであった。無論、日本の正教
会の典礼文の中にも、天皇陛下・皇后陛下のために祈るとい
う言葉が入っていた。現在でも、例えば、「晩課」や「早課」の「大
連禱」の中に「我が国の天皇及び国を司る者の為に主に祈らん」

などという言葉を聞くことができる。²²

しかし、これに対しては、一部の信徒から日本の天皇皇后両
陛下はキリスト教徒ではないから、そのために祈るのはおかし
いのではないかという疑問が宣教の当初から出されていたとい
う。明治の日本正教のイデオログであった石川喜三郎は、明
治二五年に『正教と国家』を出版して、——天皇陛下とは何か
というと、神命を奉じて一国を統御し給う者であるから、従っ
て、なぜそのために祈らなければならないかと言えば、それは、
天皇陛下が、いまだ正教の信者になってはいないとしても、や
がてはキリスト教の真理に目覚めて正教に帰依するようになる
ために祈っているからである。——と主張したという。²³

このように、皇室及び日本政府への従順を表明していたにも
拘らず、ロシアと日本との関係が険悪になるにつれて、日本正
教会に対する国民の敵意や反感はますます激しくなっていく。
日露戦争の時には「正教会は奸悪の巢であり、そこから日本
の頭上へ呪詛がふりまかれ、そこでは日本の敗北のための祈祷
が行われている。この教会は常に、ロシアに仕えるスパイたち
の中心機関であった。」といった新聞論調まで現れた。²⁴

ニコライ主教は戦争の間も日本に留まったが、そのような事
態を憂慮し、東京で次のような講話を発表する。

「ひとたび宣戦がなされたならば、日本の勝利を祈願するの
があなた方の義務です。日本の勝利が報ぜられるたびに、あな
た方は必ず神に感謝を捧げなければなりません。正教会はこの
義務を、どの国の信者にも例外なく課しています。」²⁵

また、日本の土着宗教の信者達が正教徒に対して迫害に出ることを懸念した日本政府は、内務省からすべての仏教及び神道の宗派の長に対して次のような指示を配布した。——「ロシアとの外交関係は断たれたが、戦争相手国民の個人々人に関してはいかなる憎悪敵対の感情もあつてはならない。とりわけ、宗教の領域においてはそうである。いかに信仰と宗派が異なろうとも、すべての人が例外なく同等に扱われねばならない。」²⁶⁾

しかし、このような日本政府当局の好意的な発言は、かえって正教会に対する国民の敵意や反感がいかに大きかったかを物語るものであろう。

日本の場合、正教徒の「右の頬を打つ者」は、必ずしも権力構造の頂点に立つ者ではなかった。皇帝が中心になって全国的な規模でキリスト教徒を迫害するといったローマ帝国の迫害に類する事態は、すでに明治の初年頃に終わっていた。しかし、政治的支配者の命令の下で、異教の偶像がすべて破壊され、家臣や町の住民が川岸に集められて、一度に洗礼を受けるなどというキエフ・ロシア的な出来事もまた、日本の場合は、全く予想だに不可能な事態であつた。

日本の正教会は彼等の「右の頬を打つ者」の頂点に天皇を見ている。ちょうどウラジーミル大公の場合のように、いつの日にか日本の最高支配者も必ず正教徒に改宗することになろう、そして、その支配者の改宗によって我等の右の頬を打つ者達もまた改宗することになるだろうと考えていたのである。すなわち、日本の正教会はロシア正教会の伝統に従つて日本国のキリ

スト教団教化を夢想したのであつた。

しかし、日本の権力構造はロシアのそれと大きく異なっている。それにも拘らず、日本正教会は、「右の頬を打つ者」が必ずしも最高権力者に連なる者達ではないという日本の権力支配の複雑な二重構造への認識を欠いていた。ロシアのツァーリ権力の伝統に従つて日本の支配構造を理解しようとしていたところにその認識の根本的な弱さがあつたといつてよい。

従つて、邪教の故をもつて教職員などの公職を追われながらその同じ正教徒が、天皇の地方巡幸に出会ふと、代表を出して祝詞を奉呈するなどといったことが、地方的には、決して珍しくない出来事として起こり得たのである。²⁷⁾日露戦争に際して日本政府がとつた正教徒への好意的な態度によって、日本の正教徒達が日本国のキリスト教化という空しい希望を抱いたとしても、それをもつて彼等の宣教の誤りとすることは許されないだろう。彼等は「右の頬を打つ者」に対する正しい認識を欠いたまま、常に左の頬を向け続けてきたのである。

日本の正教会が急速に教線を伸ばしながら、それにも増して急速に衰退していったのは、この日本の特殊な権力構造への正しい認識を欠いていたことによるのではなからうか。

日本正教会の衰退は、ロシア革命と同時にロシアから日本への援助（とりわけ資金援助）が途絶えたことによつて著しく促進され、関東大震災の巨大な被害によつて加速されるが、更にそれは第二次世界大戦の敗北によつて決定的となる。

内村鑑三不敬事件に関連して日本の正教徒がとつた、とりわ

け他とは異なつた権力への迎合的な立場も、このような宗教と権力というコンテキストの中において考えられなければならない問題なのではなからうか。

八 結 語

昭和四四年、日本の正教会は、自治独立を認められ、翌年、「聖自治独立教会」として再出発を果たす。「ニコライ堂」に府主教庁を置き、仙台・東京・京都の三カ所に主教座を設け、布教の態勢を整えている。従つて、他のキリスト教諸派に比べていまだ劣勢は覆い難いとしても、「教勢はいまや徐々に回復に向かつてゐる」という⁽²⁸⁾。また、正教会を「初代原始キリスト教の伝統を、いちばん純粹にうけついでいる」、「いちばん理想に近い形態」とみてその復興を期待する声もある⁽²⁹⁾。

国家元首を受洗させて、日本全土を正教化しようという期待が潰えてから、すでに久しい。キリスト教がいかに「覇道の宗教」であれ、日本において「右の頬を打つ者」たろうとする努力はもはや無益である。同時に、「左の頬を向け」ながら、いつの日か森林や山岳に息をひそめて生き延びていく修道の生活に徹することもすでに不可能であらう。今そうであるならば、とりわけ、長く厳しい苦難の道を歩み続けてきた体験を持つ宗教である日本の正教会には、聖書の原点に帰り、「狼の群れに送り込まれた羊」となつて、「蛇のように賢く、鳩のように素直に」(マタイ二〇：二六)、二極化してしまつたキリスト教を

統一へともたらずべき「第三のキリスト教」を生み出していくような、開かれた教会たろうとする努力が期待されてよいのではなからうか。日本の正教会が近代日本を形成した最も強力な思想的ルーツの一つであつたことは確かなのであるから。

〔註〕

- (1) 小沢三郎著『内村鑑三不敬事件』、新教出版社、一九六一年、四九頁以下、及び、関根正雄編著『内村鑑三』、清水書院、昭和四三年、五四頁以下などを参照。
- (2) 小沢三郎著、前掲書、一五九頁以下。
- (3) 小沢三郎著、前掲書、一六〇―一六二頁。また、長縄光男著『ニコライ堂の人々』、現代企画室、一九八九年、一〇―一四頁も参照。
- (4) 中村健之介訳編『明治の日本ハリストス正教会 ニコライの報告書』、教文館、一九九三年、一頁。ポズニエーフ著、中村健之介訳『明治日本とニコライ大主教』、講談社、昭和六一年、一四頁。
- (5) ポズニエーフ著、前掲書、五二、七二頁。
- (6) ポズニエーフ著、前掲書、一四二頁。
- (7) "Documents of the Christian Church", Selected and Edited by HENRY BETTENS, Oxford University Press, 1967, p.15-16.
- (8) 井上浩一著『生き残つた帝国ビザンティン』、講談社、

一九九〇年、三八―四一頁。

(9) HENRY BETTENSON, Op.cit. P.22.

(10) 田中陽児著『修道司祭ニコライ(中村健之介訳)』『キリスト教宣教師の観点から見た日本(一八六九年)について』

(『ロシア史研究』、二八号、一九七八年、所収) 三〇頁。

(11) 和田廣著『ピザンツ帝国』、教育社、一九八八年、四一―四三頁。

(12) HENRY BETTENSON, Op.cit. P.22.

(13) 拙稿『殉教者宗教としてのキリスト教』(『秋田大学教育学部研究紀要』、第三十三集、昭和五八年、一九頁以下所収)

参照。

(14) 以上の記述はすべて次の書に従っている。森安達也著『東方キリスト教の世界』、山川出版社、一九九一年、二六一―二六三頁。(複雑な歴史を極めてコンパクトにまとめた名著である)。

(15) 廣岡正久著『ロシア正教の千年』、NHKブックス、日本放送出版会、一一五頁以下。

(16) 中村健之介訳編『明治の日本ハリストス正教会 ニコライの報告書』、前掲書、一三七頁〔訳者注〕。

(17) 同書、一七八―一七九頁。

(18) ボズニエーエフ著、前掲書、四二頁。

(19) 中村健之介訳編、前掲書、一七九頁。

(20) 中村健之介訳編、前掲書、一八〇―一八二頁。及び、小澤三郎著『日本プロテスタント史研究』、東海大学出版会、

一九六四年、二三九―二四二頁参照。

(21) 安田寛著『唱歌と十字架』、音楽之友社、一九九三年。

(22) 長司祭ロマン大川満編『徹夜禱 単音聖歌譜』、東海道プロック宣教委員会、一九九三年。

(23) 森安達也著『東方正教会と国家権力』(『国家と宗教』、現代キリスト教国際叢書七、国際クリスチャン教授協会編、星雲社、一九九三年、所収、五七〇―五七一頁) 参照。

(24)、(25)、(26) ボズニエーエフ著、前掲書、一四〇頁、一六八頁、一五八―一五九頁。

(27) 例えば、宮城県の高清水町などにその一例を見てとることができる。佐々久監修『高清水町史』、高清水町史編纂委員会、昭和五一年、一一―一四頁以下参照。

(28) 長縄光男著、前掲書、一五頁。

(29) 高井寿雄著『ギリシア正教入門』、教文館、一九八〇年、五頁

(もちだ・ゆきお 秋田大学教授)

(一九九四・五・二二)